



京田辺市における

継体天皇ゆかりの

伝承地を訪ねて

1500 年前、京田辺市は日本の首都だった？

京田辺市観光ボランティアガイド協会

目 次

はじめに	1	息長氏との関わり①	54
京田辺市の位置	2	息長氏との関わり②	55
地名の変更	3	第四章	
筒城宮と継体天皇	4	筒城宮の候補地	56
第一章		都谷付近	58
日本書紀の記録①	5	普賢寺付近	59
日本書紀の記録②	6	三山木越前付近	60
日本書紀の記録③	7	飯岡付近	61
日本書紀の記録④	9	田辺高校付近	62
日本書紀の記録⑤	10	薪堂ノ後付近	63
日本書紀の記録⑥	11	田辺警察署付近	64
継体天皇攘夷反対派賛成派	12	堀切古墳群	65
継体天皇が造営した宮	14	第五章	
樟葉宮	15	京田辺市の古墳、史跡	70
筒城宮	19	普賢寺・天王地区・下司古墳	71
乙訓宮	22	山崎地区・山崎古墳	73
磐余玉穂宮	26	飯岡地区	74
第二章		ゴロゴロ山古墳	75
継体天皇と妃達	28	薬師山古墳	76
目子媛	29	阿弥陀山古墳	77
稚子媛	30	飯岡車塚古墳	78
広 媛	31	上殖葉王古墳	79
麻積娘子	32	トヅカ古墳	80
関 媛	33	飯岡東原古墳	82
倭 媛	34	大住地区・大住車塚古墳	83
夷 媛	38	姫塚古墳	85
広 媛（根王の女）	39	その他の伝説	86
手白香皇女	40	不違の池・鉾立の 松、杉	87
第三章		酒屋神社の 3 個の壺	88
京田辺市の地理的条件	41	酒造りの発祥地？	89
甘南備山	43	奴理能美の養蚕	90
平安京の基点	45	おわりに	
巨椋池	47		
大和政権の水上交通	50		
大和政権の陸上交通	51		
京田辺市の歴史的条件	53		

はじめに

本冊子は、京田辺市が平成 23 年に継体天皇がおこなった筒城宮遷都 1500 年記念事業の一環として、京田辺市観光ボランティアガイド協会が「京都 e ラーニング塾」に配信した内容を編集したものです。

継体天皇は京田辺市民にとってもあまりよく知られていない謎の天皇といわれていますが、古事記には 511 年、この地に「筒城宮」を作り、約 7 年間を過ごされたと記されています。近年の発掘調査の結果や伝承話、言い伝えなど数多く残されています。これらの事象について確たる物証や査定がなされている訳ではありません。しかし私達はこれらの事柄をボランティアガイドの立場から調査し集約して、ガイド活動に活かしております。

今回、紹介する内容は、五章から構成されています。

第一章は、継体天皇の誕生から京田辺市に「筒城宮」を遷都するまでの背景を紹介します。特に天皇に即位後、大和に入るまでの「宮」の変遷について説明します。

第二章は、継体天皇の皇妃について、その結婚の意義を説明し、その後、京田辺市に「筒城宮」を置いた理由とその「宮」がどのあたりにあったかを説明します。

第三章は京田辺市の地理的、歴史的条件について説明します。

第四章は「筒城宮」の候補地について説明します。

第五章は、京田辺市の古墳群と史跡、伝説について紹介します。

京田辺市の位置



甘南備山からの眺め

京田辺市は北に京都、南は奈良のほぼ中間に位置し、古の交通に重要な役割を果たした木津川西岸のなだらかな丘陵に広がっています。

奈良時代には奈良の都と九州太宰府をつなぐ山陽道が整備され、この地に「山本駅」が設置されるなど、陸上交通の重要な拠点として発展したところです。

地名の変遷

やましろ

山代



山背



山城

つつき

筒木



筒城



綴喜



手原川河口付近



甘南備山

京都市を含むこのあたりは「ヤマシロ」と呼ばれ、5世紀ないし6世紀には「山代」と書かれ、8世紀ごろには平城京の背後にあるということで、「山の背」と表記されていました。「山の城」と表記されたのは平安京以降とされています。

また、京田辺市は平成9年、市政が布かれた以前は「綴喜郡」と呼ばれており、古の時代には「筒の木」と書いて「筒木」、また「筒の城」と書いて「筒城」と呼ばれていました。

この筒城の里に、わずか7年間ほどですが日本の首都ともいえる「宮」がおかれしました。

筒城宮と継体天皇



「筒城宮跡」石碑
(同志社大学京田辺キャンパス内)



福井県足羽山頂の
継体大王石碑

その「宮」は、西暦**511**年第**26**代継体天皇によって、この地に置かれた「筒城宮」です。

そして、この「筒城宮」がおかれて今年には1500年目にあたります。これを機に「京田辺における継体天皇ゆかりの伝承地を訪ねて」と題し、継体天皇とゆかりのある古墳や伝承地を紹介します

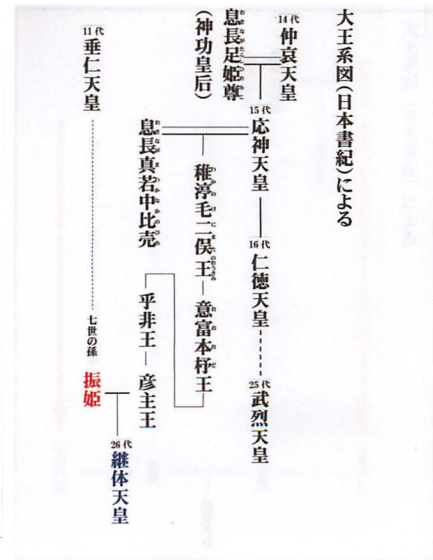
継体天皇は謎の多い天皇といわれているように、京田辺市内にある古墳、伝承地にもこれが継体天皇のものだといえる確たる証拠はほとんどありませんが、地域の伝承話や「いわれ」、巷の話、古墳、史蹟など、観光ボランティアガイドの立場から紹介します。

日本書紀の記録①

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇

原文

男大迹天皇 更名彦太尊。譽田天皇五世孫、彦主人王之子也。母曰振媛。振媛、活目天皇七世之孫也。...



第一章

この章は繼體天皇の誕生の経緯と、天皇に即位後、大和の磐余玉穗宮にはいるまでの二十年間の様子を紹介します。特に繼體天皇を取り巻く時代の歴史的背景と、「宮」の変遷を紹介します。

日本書紀、卷第十七には次のように記されています。

「男大迹天皇またの名を彦太尊。譽田天皇の五世の孫、彦主人王の子也。母は振媛と曰。振媛、活目天皇の孫也。」とあり、現代語訳すると

「男大迹天皇またの名を彦太尊といい、應神天皇から数えて五世の孫で、彦主人王の皇子といわれています。母は振姫といい、垂仁天皇の七世の孫といわれています。」となります。

日本書紀の記録②

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇(続き)

原文

天皇父聞振媛顔容姝妙甚有嫩色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、中、此伝那 納以為妃。
遂産天皇。々々幼年、父王薨。...



続いて日本書紀には、

「天皇の父、振媛が顔容姝妙しくて、甚だ嫩色有りという事を聞きて、近江国の高島郡の三尾の別業より、使いを遣わして三国の坂中井(此をば那と云う)に聘へて、納れて、妃としたまふ。遂に天皇を産む。天皇幼年くして、父の王薨せましぬ。...」とあります。

現代語訳では

「父の彦主人王は、振媛が容姿端麗で非常に美しい女性だと聞き、三国の坂中井に遣いを出して、妃としました。そして西暦450年、継体天皇が誕生します。しかし継体天皇が幼いころに父が薨ってしまいます。...」となります。

日本書紀の記録③

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇(続き)

原文

振媛廼嘆曰、妾今遠離桑梓。安能得
膝養。余歸寧高向、高向者、越前國巴
名。奉養天皇。
々々壮大、愛土禮賢、意豁如也。...



「そのため振媛は我が子を自分の両親が住む故郷・高向(ここは越前[こしのみちのくち]で現在の越前です)に移し、この地で育てた」と記されています。

越前 三国の坂中井



足羽山頂から三国方面を望む

足羽山頂の
継体大王石碑

このころの越前は朝鮮半島を通して大陸との交流が行われ、交通の要所に当たりました。従って内陸部にある大和朝廷よりも先んじて、大陸からの政治文化を吸収する事ができ、この地の有力豪族は経済的にも軍事的にも大きな勢力を持つことができたのです。

このような日常の中で成長した彦太尊は、斬新な技術やアイディアを養い、そして当時の情勢を理解し、判断する力を身につけて行きました。また父を早く亡くしたため、多くの災難や苦労を体験したが、忍耐強く優しく堅実な心も育んでいきました。こうして越前を愛する長に成長し、心広く豊かな人柄柄だったと伝えられています。

日本書紀の記録④

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇

原文

天皇年五十七歳、八年冬十二月己亥、小泊瀬天皇崩。元無男女、可絶繼嗣。壬子、大伴金村大連議曰、方今絶無繼嗣。天下何所繫心。自古迄今、禍由斯起。今足仲彦天皇五世孫倭彦王、在丹波國桑田郡。請、試設兵仗、夾、衛乘輿、就而迎、立為人主。大臣大連等、一皆隋焉、奉迎如計。於是、倭彦王、遥望迎兵、懼然失色。仍遁山壑、不知所詣。…(次ページへ続く)

第二十五代武烈天皇が崩御された後のことが、日本書紀には次のように書かれています。

「八年の冬十二月の己亥に、小泊瀬天皇崩りましぬ。元より男女無くして、継嗣絶ゆべし…」

現代語訳では

「八年の冬、十二月八日に武烈天皇が崩御されましたが、天皇には皇子、皇女がなく、世継ぎが絶えてしまいました」そこで大伴金村大連が会議を行い、今まさにお世継ぎがない。こんな状態が続くと、禍が起こるので、早く決めなければならない。そこで仲哀天皇の五世の孫、倭彦王を丹波の国へ迎えに行くことになりましたが、倭彦王は物々しい兵をみて山へ逃げてしまいました…」

日本書紀の記録⑤

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇

原文

元年春正月辛酉甲子、大伴金村大連、更籌曰、男大迹王、性慈仁孝順。可承天緒。翼慰勸進、紹隆帝業。物部麿鹿火大連、僉曰、妙簡枝孫、賢者唯男大迹王。丙寅、遣節以備法駕、奉迎三國。夾衛兵仗、肅整容儀、警蹕前驅、奄然而至。於是、男大迹天皇、晏然自若、踞坐胡床。齊列陪臣、既如帝坐。持節使等、由是敬憚、傾心委命、冀盡忠誠。・・・
(次ページへ続く)

そこで、

「大伴金村大連は再度会議を開き、物部麿鹿火大連、許勢男大臣らの賛同を得て、三国に住まいする男大迹王を推薦し、越前の三国に迎えの使者を派遣しました。そこに見た男大迹王の泰然自若として、陪臣を従えている姿に、すでに帝の座すが如しと、使者たちはその場でその王に忠誠を尽くすほどであった」と記されています。

日本書紀の記録⑥

日本書紀 卷第十七 男大迹天皇 繼體天皇

原文

然天皇、意裏尚疑、久而不就。適知河内馬飼首荒籠。密奉遣使、具述大臣大連等所以奉迎本意。留二日三夜、遂發。...



「樟葉宮」跡
(大阪府枚方市 貴船神社)

「しかし皇位を継ぐには 意の裏に尚疑いありて として皇位につきませんでした。これを払拭したのは、河内馬飼首荒籠が大臣、大連は男大迹王を心から歓迎していることを伝える密書を、男大迹王に遣わしたことに由ります」

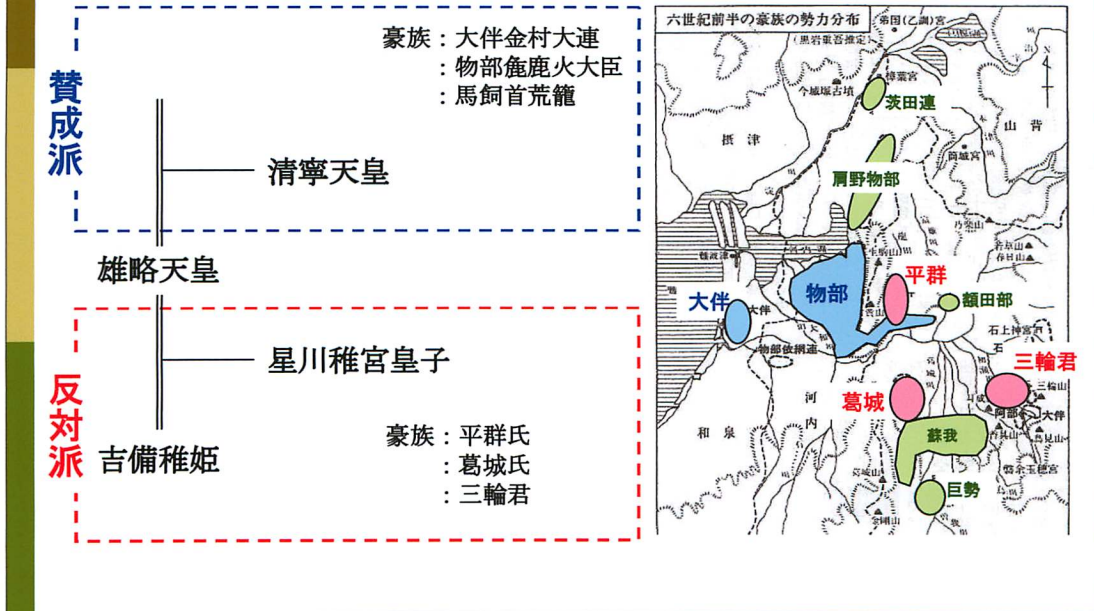
こうして樟葉の宮に入り、鏡、剣、璽符を受け取り即位しました。・・・と書かれています。

この時も男大迹王は「自分はこの器に非ず」と辞退されましたが、大連の再三の要請にやっと引き受けられたと記されています。

儀礼的にこのような行動をされたのか、人柄ゆえのものか、あるいは反対勢力があまりにも大きかった為に躊躇されたのでしょうか。

写真は今現在、継體天皇が最初の宮として造営された「樟葉宮」跡といわれている貴船神社です。

繼體天皇擁立 賛成派・反対派

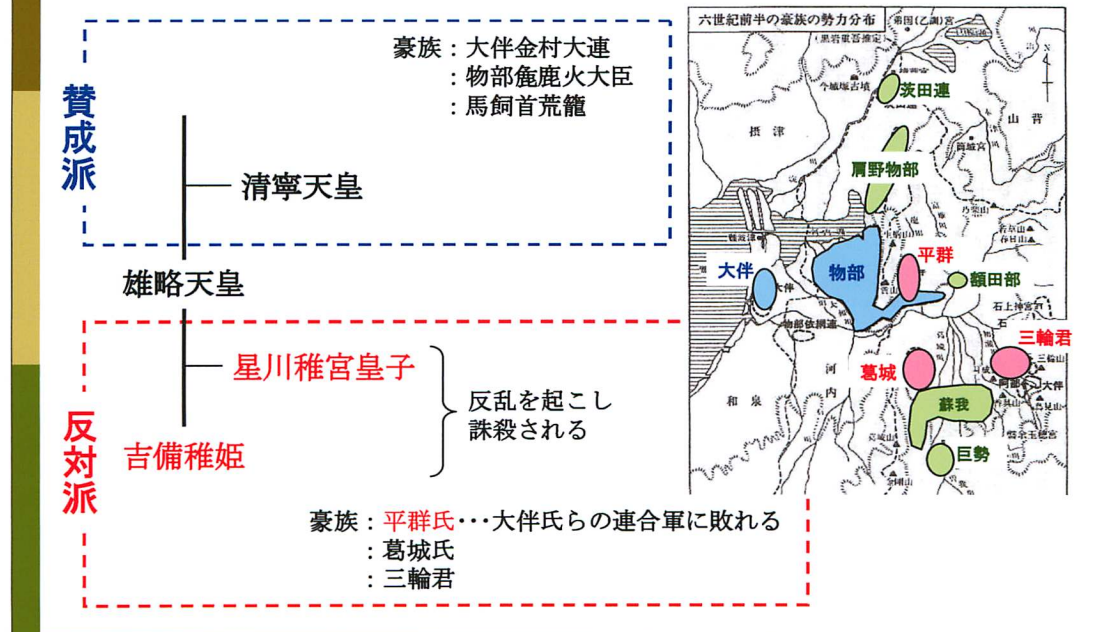


ここで少しこの時代の豪族の政治勢力について解説します

当時の大和政権は葛城、平群、巨勢、三輪、蘇我、大伴、物部、などの豪族の連立政権でありました。

第二十一代雄略天皇は、兄たちや親族の皇位継承者を次々と殺し即位しましたが、そのなかで葛城市の円大臣の邸に逃げ込んだ兄の坂合黒彦皇子を円大臣ともども殺害し、古くからの最有力豪族である葛城氏を制圧し、衰退していた天皇の権力を強めました。

継体天皇擁立 賛成派・反対派（結果）



その結果、台頭してきたのが大伴氏、物部氏であり、これらの新興豪族に加え和珥氏(安部氏)などが、継体天皇擁立派でした。反対派は、平群氏、葛城氏の残党から支持された蘇我氏や三輪氏でした。

雄略天皇崩御後、大伴、物部氏は天皇の妃・吉備稚姫(この方は吉備上道臣の娘です)の子である星川稚宮皇子が起こした反乱を鎮圧し、母子共に誅殺しました。この事件で、天皇に次ぐ勢力を誇った豪族の吉備氏は衰退していきます。

そして清寧天皇を擁立し、大伴氏は大連、物部氏は大臣を引き続き賜ります。

また、第23代顕宗天皇から臣であり権勢を誇っていた平群臣真鳥は、その子・鮪が稚鷦鷯太子(第二十五代武烈天皇)と物部麿鹿の娘・影姫をめぐって争い、影姫を奪ったことを口実に大伴氏の軍に殺されてしまいます。

継体天皇が造営した宮



こうした反対勢力の豪族たちの動きによって、継体天皇は即位後二十年、大和朝廷の本拠地に入ることもなく、南山背の地を転々とするようになるのです。

図表は継体天皇が福井を出て、磐余玉穂宮に入るまでに造営した3つの宮の場所を示しています。

大和の三都

丹波

琵琶湖

山城

近江

宇治川

桂川

馬飼

攝津

茨田

綾川

河内

木津川

大和

磐余玉穗宮

筒城宮

樟葉宮

乙訓宮

物部



この地はあの馬飼一族の勢力範囲の土地でした。名前のごとく、馬の飼育に長けている渡来人で、物部氏に馬を提供する事により、物流や軍事力(兵站)の端を担っていたと考えられます。また隣接する現在の寝屋川市、門真市近郊は、かつて屯倉を管理していた茨田連の所領があり、これらの部族も早い時期、継体天皇の傘下に入っていました。この事は天皇が大和へ進出するための大きな理由の1つであったと考えられます。



現在、樟葉宮と伝えられているところは、大阪府枚方市樟葉付近にあり、石清水八幡宮が鎮座する男山の西側の丘陵とされています。

16

貴船神社

樟葉の宮一首（関白左大臣一条実経）

くもらじな ますみの鏡

かげそふる

樟葉の宮の 春の夜の月

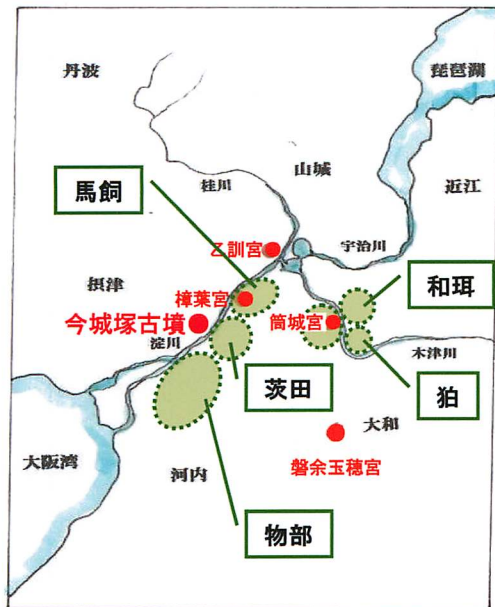


この地には継体天皇を祭神とする貴船神社が建てられています。街の中からいったん神社の境内に入ると一種の霊気漂う緊張感が感じられるところです。

ここには関白左大臣一条実経の歌一首が書かれています。

くもらじな ますみの鏡 かげそふる
くずはの宮の 春の世の月

今城塚古墳



また、後に詳しく述べるように、ここは三川合流の水運盛んな地であった事も重要な条件です。

茨田氏領地の対岸には継体天皇陵といわれる今城塚古墳があります。写真は今城塚古墳とそこから出土した石棺を復元したものです。



この地域は息長氏とつながりが強い地域であり、木津川の対岸には和珥氏や狛氏の勢力がありました。京田辺市と息長氏との関わりは、別の章でお話します

大和朝廷にとっても三輪山の麓から奈良山を越え、この木津川を下って淀川を通り、瀬戸内海に抜ける大切な水路交通の要にもなっており、逆にいえば「筒城宮」から大和へは水路で簡単に入れるわけです。

19

筒城宮伝承地①



さて、それでは「筒城宮」はどこにあったのでしょうか。

現在は同志社大学京田辺キャンパス内に「筒城宮跡」の石碑があります。

同志社大学の正門を入りますと正面に構内のメイン道路が開けます。この道を入ると右側すぐに「筒城宮跡」の標識があり、小高い丘を登っていくと、ひっそりと「筒城宮跡」の石碑が立っていますが、この石碑は、もともとここに建立されたのではなく、時代の移り変わりに応じて現在の同志社キャンパス内に移されたものです。

筒城宮伝承地②



いそのかみ 古き都の
あと訪ひて
筒城の丘になく
ほととぎす

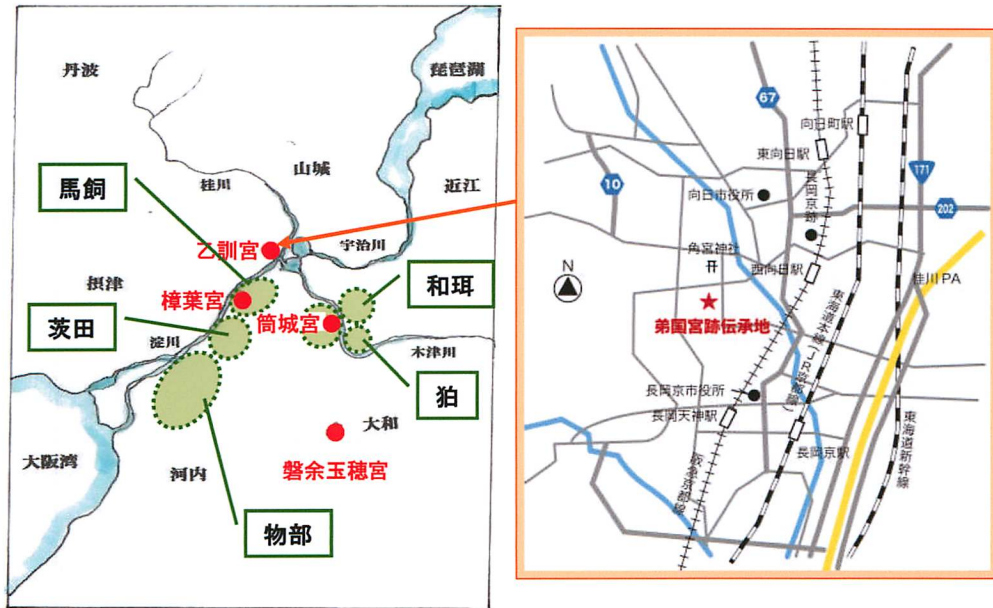
石碑の隣には日本の外交を支えた元外務次官・村田良平の父であり、京田辺市郷土史会の先駆者・村田太平氏の歌碑があります。

いそのかみ 古木みやこのあと訪ひて
筒城の丘の 鳴くほととぎす

ただ「筒城宮」がこの場所にあったのかというと、実は様々の意見があり、未だに確定しておりません。

筒城宮の候補地については、第二章で述べます。

3番目の宮～乙訓宮～



「筒城宮」から7年後の518年、第三番目の宮が乙訓に造営されました。

この地域は尾張氏の同族の拠点の1つといわれています。

乙訓宮伝承地

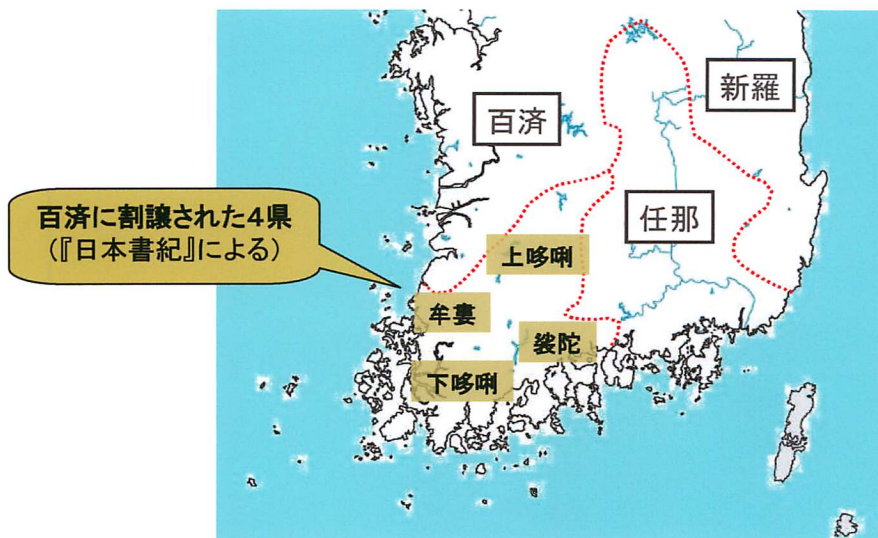


では「乙訓宮」はどこにあったのでしょうか

それは京都府長岡京市今里付近と考えられていますが確かではありません。

乙訓は長岡、向日、大山崎地域を含めた地域をいいますが、現在は乙訓寺付近を指してこう呼んでいます。

乙訓宮遷都の理由～朝鮮半島情勢～



ところで大和に近づいた筒城宮を何故また離れて乙訓に都を移されたのでしょうか。

その理由の1つに、任那の4県割譲などの朝鮮半島の情勢が見られます。またこれに合わせて、九州の磐井等の豪族たちの反乱などが出てきたためといわれています。

乙訓宮遷都の理由～水路の掌握～



弟国(乙訓)宮伝承地

3つの川(桂川・宇治川・木津川)が合流し、淀川に流れる。

2つ目には、継体天皇に対する反対勢力がまだ弱まらなかったことがあげられます。

さらに水路の完全確保のためと言われています。それはこの土地が桂川、宇治川、木津川の合流地点に近かったことによります。

。



木津川、宇治川、桂川の三川合流地点

4 番目～磐余玉穗宮～



そして天皇に即位して20年目、526年、ようやく大和の「磐余玉穗宮」に入ります。

「磐余玉穗宮」に入れた理由の1つに、新羅と結んだ北九州の豪族・磐井の乱が挙げられるでしょう。

当時、朝鮮半島や中国(宋)との拠点であった博多を占領されることは、伽耶(任那)に根拠を置き、高句麗の南進に備え、百済を支配し、伽耶に進行する新羅を討とうとしていた大和政権にとって重大事であり、このため反継体派の中枢であった蘇我氏が妥協した為でした。その妥協策は継体天皇の2人の皇子、すなわち後の安閑天皇となる句大兄皇子と、後の宣化天皇となる檜隈高田皇子を大和に住ませる事が条件でした。

そして初めて大和の地を踏む事が出来たのです。また蘇我稲目の説得で三輪君や葛城の残党も継体天皇の大和入りを承諾したと言われています。その後、蘇我氏は宣化天皇に娘を嫁がせ、外戚として権力を握りました。

磐余玉穂宮伝承地



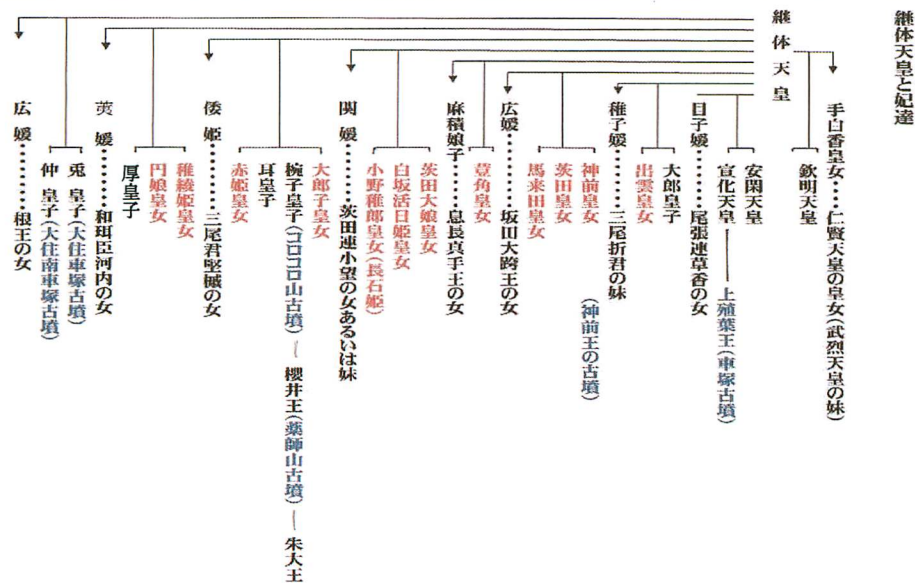
では磐余玉穂宮はどこにあったのでしょうか。

磐余は飛鳥に隣接する奈良県桜井市の南部地域をいい、磐余玉穂宮の所在地はその桜井市池之内付近とされています。

磐余は神功皇后、履中天皇が都を置いた磐余稚桜宮があり、息長氏を出自とする継体天皇にとって、神功皇后ゆかりのこの地こそ、大和での宮にふさわしい場所であったのかもしれませんが。

ただこれも伝承の域を出ず、考古学的に根拠づけられているわけではありません。

継体天皇と妃達



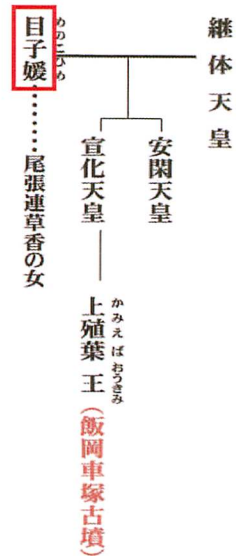
第二章 継体天皇の皇妃達

継体天皇は天皇の位を受けて大和の都に入るまで20年を要したとされています。そこには大きな後ろ盾を持たなかった継体天皇が、大和朝廷内部にある反継体派に対抗するためにさまざまな努力をした跡がうかがえます。その1つに皇位につく以前から多くの有力豪族の娘を妃にしており、この婚姻により権力の拡大を図った様子がわかります。

継体天皇には皇后と8人の妃がいたと日本書紀に記されています。その8人の妃の出身地と皇子、皇女達を見てみましょう。

継体天皇は当時の交通の要の琵琶湖や淀川、木津川水系を治めるため、近江、尾張、河内、大和の豪族の娘たちを妃とし、万全な力を付けていったと考えられます。

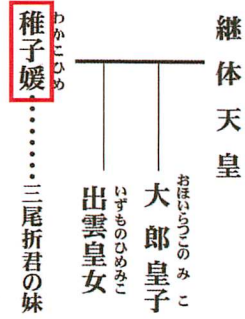
目子媛



はじめの妃は尾張の国の豪族である尾張連草香の娘で日子媛
といい、後に安閑天皇となる勾大兄皇子と、宣化天皇となる檜隅
高田皇子をもうけました。また宣化天皇の皇子に上殖葉王という
皇子がいますが、その古墳といわれる車塚古墳が京田辺市の
飯岡にあります。

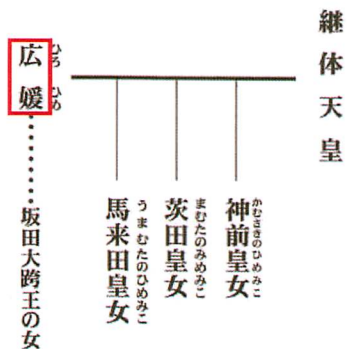
また宣化天皇の皇女である石姫が、欽明天皇の皇后となり、敏達天皇を産みました。

稚子媛



次の妃は近江の国の高島三尾(湖西)地方の豪族である三尾角折君の妹の稚子媛で大郎皇子と出雲皇女を産みました。

広媛



次に近江の国、坂田北部の豪族である坂田大跨王の娘で名を広媛といい、三人の皇女を産みました。神前皇女、茨田皇女、馬來田皇女です。

この皇女達のうち、神前皇女が嫁いだ神前王の古墳が飯岡にあったと伝えられていますが、現在所在は不明です。

麻積娘子



麻積娘子……息長真手王の女

荳角皇女(伊勢大神の祠に侍り)

繼体天皇

それから近江の国、坂田南部の豪族である坂田郡の息長真手王の娘で、麻積娘子は伊勢神宮の斎宮となった荳角皇女を産みました。

閔媛



関
媛

・茨田連小望の女あるいは妹

繼體天皇

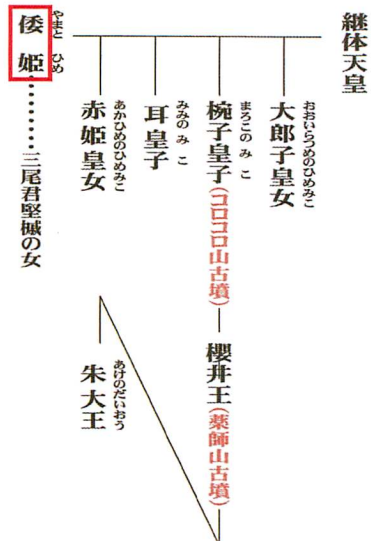
まむたのおほいらつめのひめみこ
茨田大娘皇女

しらさかいくひひめのみこ
白坂活日姫皇女

おののわかにらつめのひめみこ ながいわひめ
小野稚郎皇女（長石姫）

そして河内の国、北河内の豪族である茨田連小望の娘、関媛は
図に示すように三人の皇女を産みました。

倭媛



次に越の国の豪族、三尾君堅槓の娘倭姫は、二男二女を産みました。

第一子は大郎子皇女で、第二子は皇子です。

その後、耳皇子と赤姫皇女を産んでいます。

ゴロゴロ山古墳（梔子王古墳）



梔子王古墳
（京田辺市飯岡）

京田辺市飯岡にはこの梔子王の陵墓だと言い伝えられている古墳があります。当地ではゴロゴロ山古墳と呼ばれています。

薬師山古墳（櫻井王古墳）



櫻井王古墳（京田辺市飯岡）

そして継体天皇の孫である椀子皇子の子にあたる櫻井王の陵墓が飯岡にある薬師山古墳だと言い伝えられております。

飯岡の七つ井戸



櫻井王の井戸（京田辺市飯岡）

また、丘陵の飯岡には先人が造った井戸の遺跡があります。
「飯岡の七つ井戸」といい、その1つに「櫻井王の井戸」が残っております。

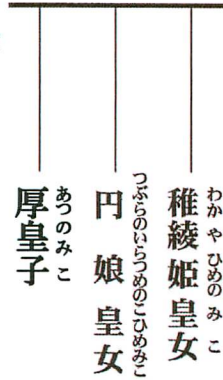
写真は蓋い屋に囲まれた櫻井王の井戸跡といわれています。

荑媛



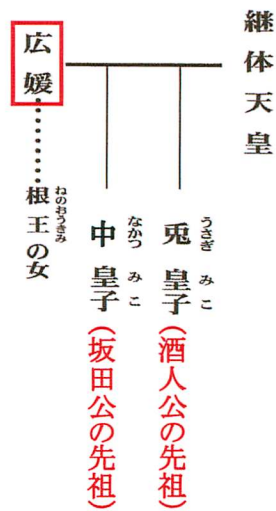
荑媛
はえひめ
……
和珥臣河内の女

継体天皇



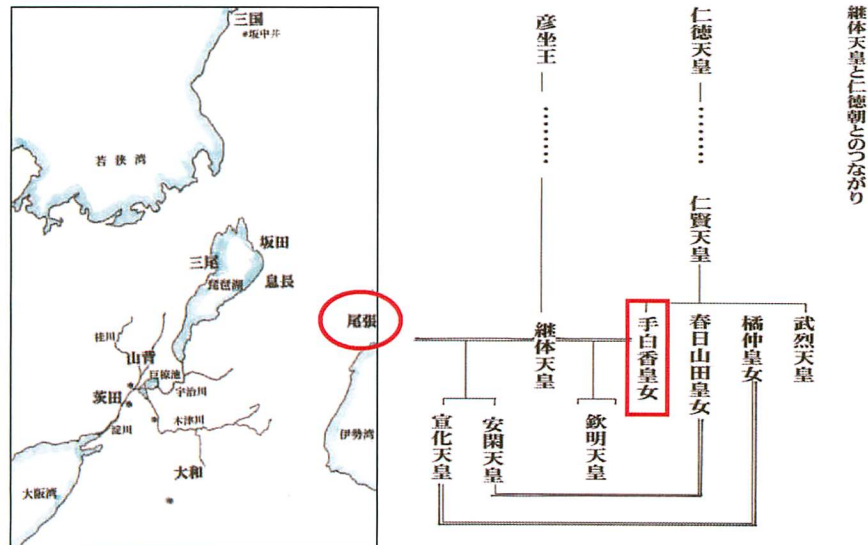
次に大和の国の豪族、和珥臣河内の娘、荑媛は稚綾姫皇女、円娘皇女、厚皇子を産みました。

広媛



近江の国の豪族、根王の娘で、もう一人の広媛は、京田辺市山崎の2号墳が陵墓だと言い伝えのある、酒人公の先祖である
 兎皇子と、坂田公の先祖である中皇子を産みました。

手白香皇女



そして58歳で即位したと言われている継体天皇は、大伴金村等の進言により、仁賢天皇の娘で武烈天皇の兄弟の手白香皇女を皇后として迎えました。入り婿として仁徳朝から続く天皇の血統を続承して欽明天皇をもうけ、分裂状態だった大和朝廷に対し、尾張、近江、河内、大和の豪族たちをバックに勢力をつけていきました。

日子媛の皇子・安閑天皇は手白香皇女の妹・春日山田皇女を妃に迎え、同じく宣化天皇はやはり手白香皇女の妹・橘仲皇女を妃に迎えました。

このように尾張、近江、河内、大和などの豪族と婚姻関係を結ぶことにより、勢力を着実に拡大し、次の欽明天皇の時代に不動のものとして橋渡ししていった効果は大なるものがあったと考えられます。

京田辺市の地理的条件



花見山公園から京田辺市街地を臨む

第三章 京田辺市の地理的、歴史的

継体天皇はなぜこの地を選んで「筒城宮」を造営されたのでしょうか。

ここでは地理的条件ならびに歴史的条件の面から述べてみたいと思います。

では地理的条件とはいったい何でしょうか。その大きなキーワードの一つは甘南備山とその丘陵の地形、二つめこ木津川による水運が挙げられます。

地理的条件とは



木津川と甘南備丘陵

木津川流域の人々は、西方に望む丘陵を甘奈備丘陵と呼んでいます。

京田辺市はこの甘奈備丘陵を西に仰ぎ、東には木津川を望む地にあります。地理的には南山城地域の中心にあり、京都・大阪・奈良の三都からほぼ同じ距離のところに位置しています。

甘南備山



飯岡丘陵から甘南備山を臨む

文化的な面からみれば京田辺付近が京都文化圏と奈良文化圏のちょうど中間点になるといわれています。

また甘南備丘陵の最西端には古来、聖なる山として崇拝されてきた二上形式の甘南備山があります。

かなび山



神奈備
神南備
神無火
甘南備

カンナビサンは全国所々にありますが、その表記は図表に示すようにいくつかの書き方があります。

いずれも「神が鎮座する場所、あるいは神様が降臨する場所」などの意味があります。

京田辺市の甘南備山は「甘い、南」と書いて甘南備と読み、古代から木津川流域の人々の信仰の対象とされています。

平安京の基点



標高220mほどの山ですが、山頂にある展望台からは京田辺市が一望できます。

かつて平安京が定められるとき、この山を南の基点とし、北の船岡山とを結ぶ直線を都の中心軸として大極殿、朱雀門、朱雀大路、羅生門などが建設されたといわれています。

甘南備山頂の白石



平安京建設の
基点となった白石
(甘南備山頂上)

この山には、今でもその時代に白く光っていたので、平安京建設の際に基点とされたという伝説の「白石」が鎮座しています。

巨椋池



神奈備丘陵は生駒山脈の支脈で、北に延びて淀川に接するあたりで男山丘陵となります。

古代において男山丘陵の東側は、木津川・宇治川・桂川の三つの川が合流する大きな沼でありました。

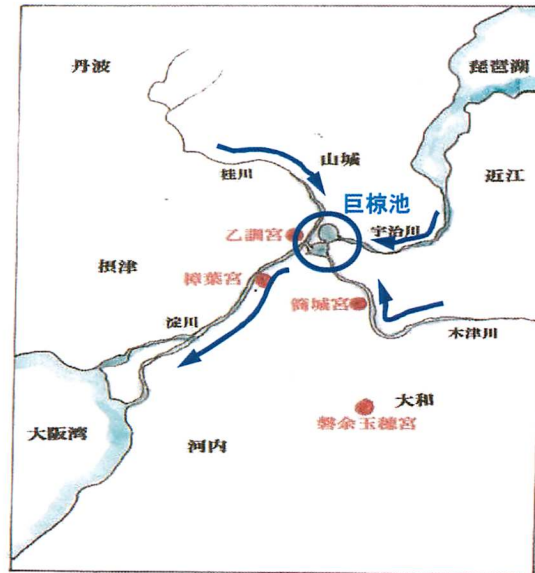
在りし日の巨椋池



いわゆる巨椋池です。この三つの川は巨椋池で合流し淀川となって八幡と山崎との狭い間を通して河内湖に流れ込み、大阪湾に流れ出ていきました。

これらの川は人や物資を運搬するための水上交通の要として大いに利用されてきました。

巨椋池



継体天皇が最初の宮を樟葉に置き、次いで筒城、さらに弟国に
営まれたのは、これらの地域がいずれもこの木津川・淀川水系に
面しているということが大きな理由の一つであったであろうと思わ
れます。

大和政権の水上交通



- ①のコース
木津川→淀川→瀬戸内海→北九州へ
- ②のコース
木津川→桂川→山陰へ
- ③のコース
木津川→宇治川→琵琶湖→北陸へ
- ④のコース
木津川→宇治川→近江・伊勢へ

大和政権は木津川を基点にして次の四つの水上交通のルートを開発し、その王権を拡大・統治していく過程で大いに活用しました。

一つ目は木津川を下って巨椋池から淀川に入り、大阪湾へ出て瀬戸内・北九州に通じるルートです。

二つ目は木津川から巨椋池、桂川をさかのぼって北方の丹波(古代の丹波は今の丹後が中心であった国でした)に通じるルートです。

三つ目は木津川から巨椋池、宇治川をさかのぼって琵琶湖を縦断し越地方(北陸)へ抜けるルートです。

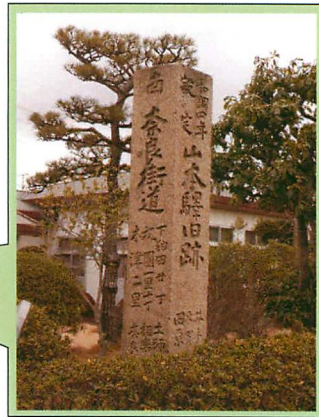
四つ目は木津川から巨椋池、宇治川をさかのぼって近江に至り、さらに美濃・尾張・伊勢湾へと通じるルートです。

これらの地域の豪族は稲作に適した生産力豊かな土地を所有し、鉄や塩などの資源に恵まれ、海上交通による諸外国・諸地域との交流・交易により大きな力を蓄えていました。

大和政権はこの四つのルートによりこれらの地域とのかかわりを深めるとともに、自らも諸外国との交流・交易を進め、高く洗練された技術・文化や人を積極的に受け入れていきました。

筒城宮はこの「木津川を基点とした水運」を抜きにしては語れないのです。

大和政権の陸上交通



山本驛旧跡
(京田辺市三山木)

一方、陸上交通に目を移しますと、大化の改新の詔でうたわれた「七道駅路」は7世紀後半から8世紀にかけて建設されたといわれており、継体天皇の時代には本格的な開発はされていませんが、その原型としての道は一定の整備がなされ、西国あるいは東国への陸上交通のルートとして活用されていたのではないかと想像できます。

これらの道は、大和を起点に、山背(現在の京都府)に入ると、木津川の両岸に沿って進み、現在の京田辺あたりで、左岸の道は山陰、山陽道へ、右岸の道は東山道、北陸道へとつながっていました。特に奈良時代には、現在の三山木付近に「山本駅」が設置され、最も重要な交通の地点とし賑わっていたと思われます。

技術や文化の流入



大住隼人舞（京田辺市 月読神社）

このような地理的背景の中で、木津川流域には3世紀～5世紀にかけて、朝鮮半島から貊・王などの渡来人や、九州南部からの隼人族など、多くの人々が移住してきました。新しい技術や文化を豊富にもたらしてくれたこれらの人々のこともこの地域の歴史を理解する上で注目しておきたい点です。

京田辺市の歴史的条件

京田辺市は古くから「息長氏」と深い関わりがあった。



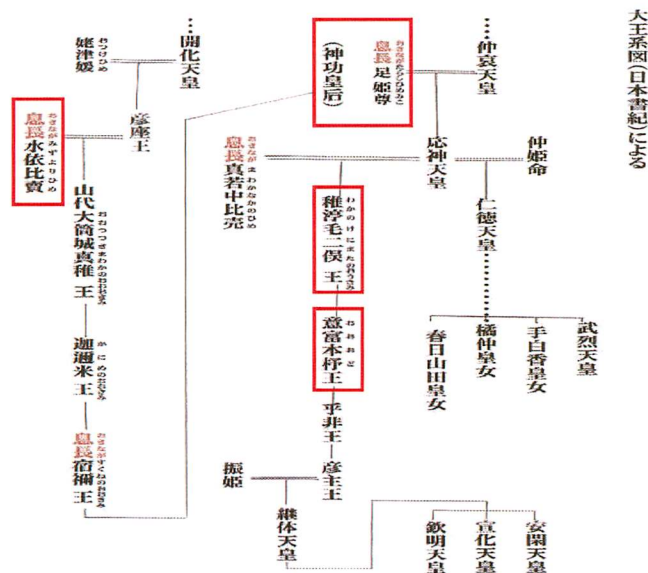
観音寺参道（京田辺市普賢寺）

次に、歴史的条件について見ていきたいと思います。

継体天皇と息長氏・観音寺とのかかわりがあります。

継体天皇がこの京田辺市に「筒城宮」を造営した背後には、謎の豪族ともいわれる息長氏が深く関与していたと考えられます。

息長氏との関わり①



息長氏は「息が長い」と書いてオキナガ、イキナガ、またはキナガ、シナガと呼ばれています。先祖は字のごとく息を長く保つ民族から海の民、または「風を吹く」から製鉄の民とも言われています。

では息長氏は古代の日本の歴史とどんな関わりを持ったのか、
天皇系図を見てみましょう。

まず日本書紀に書かれている大王系図によると、「息長」を名乗った人物が登場するのは、9代開化天皇の皇子・彦坐王の妃で、息長水依比賣です。したがって3世紀後半～4世紀にはすでに豪族として勢力を持っていたと考えられます。その息子は山城の綴喜郡の地名の元となったと言われている山代大筒城真稚王であり、その孫の息長宿禰王の娘が、有名な息長帯比売命であり、後の神功皇后です。この息長帯比売命は仲哀天皇の皇后となり、応神天皇を産みます。

応神天皇も息長氏の真若中比売を妃とし、皇子に稚渟毛二俣王が生まれます。この稚渟毛二俣王あるいはその子意富本杼王が「息長氏」の祖師とされています。

従って継体天皇は「息長氏」の氏族とは強い関係にある事が判ります。

息長氏との関わり②



上：菜の花と観音寺

右：十一面観音立像
(いずれも京田辺市普賢寺)

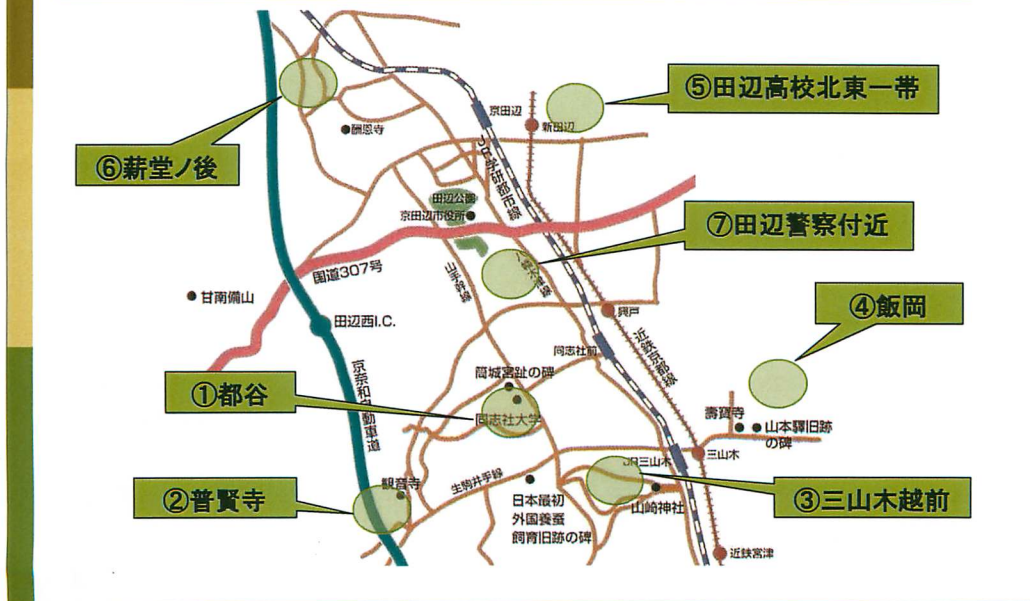


そしてその氏族がこの山城の筒木・すなわち京田辺の地域を勢力範囲に治めていたのではないかと思います。

継体天皇にとってはこの筒城は強力なバックボーンの地域であり、さらに交通、情報の中心地であるため、ここに「筒城宮」を置いたのは当然の事だったでしょう。

少し時代は下りますが、京田辺市にある普賢寺(観音寺)の古い名前を「息長山普賢教法寺」といい、山号からも息長氏との強い関わりがうかがえます。

筒城宮候補地のいろいろ



第四章 「筒城宮」の候補地

この章では「筒城宮」は京田辺市内のどこにあったのか、候補地を挙げてみたいと思います。

過去の歴史的文献や、伝承として伝えられてきた候補地に加えて、最近の発掘調査によって、いくつかの候補地が挙がってきていますが、今ひとつ決め手といえる証拠が見つかっていないのが現状です。

現在、候補地として以下の7か所が挙げられています。

その①都谷周辺、②普賢寺周辺、③三山木・越前付近、④飯岡丘陵地、⑤田辺高校北東付近、⑥薪の堂ノ後付近、⑦京田辺警察署付近などが挙げられます。

筒城宮候補地～当時の自然環境～



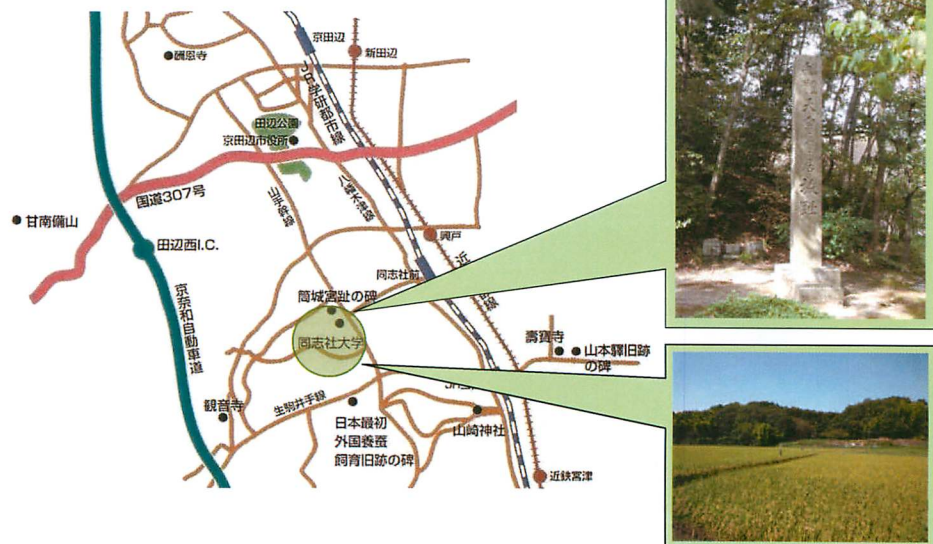
木津川の流れ

ただ、この問題を考えるときに、当時の自然環境、地理的環境は現在とはまったく違ったものであったことを視野に入れておかなければなりません。

すなわち、各河川にダムはなく、京都盆地南部の巨椋池が遊水池の役割を果たし、満々と水をたたえていたであろうこと、各河川の流れは、現在よりも豊かな水量をもって、ゆったりと流れて巨椋池に注いでいたことが想像されます。

従って、交通手段は、馬や徒歩による陸上交通以上に、水運が発達していたと思われます。

筒城宮候補地①～都谷～



それでは 5 6 頁に示した候補地について説明しましょう。

まず、筒城宮跡の石碑のある都谷から見ていきましょう。

①都谷周辺とする説

同志社大学校内にある筒城宮跡の石碑は、歴史的な文献や伝承、そして何よりも「都谷」という有力な地名に基づいて設置されたもので、近年の同志社大学の開発に伴い、最終的に同志社の構内に移設されたものです。いわば、この付近のどこかに筒城宮跡があることを象徴する意味で、ここに宮跡の石碑が設置されたのではないかと思います。

既に案内しましたが、同志社の正門を入り、まっすぐ50mほど道路を歩くと、右側に小高い丘が見えてまいります。入口の表札を確かめ、階段を上がると、「筒城宮跡」の石碑が立っています。

ちなみに、この場所は、かつて不動寺という寺がありました。

筒城宮候補地②～普賢寺～



②普賢寺谷付近とする説

この都谷に沿って普賢寺川が流れ、現在より水量が豊富で、木津川から容易に遡上できたと考えられます。

そして古くから百済系の渡来人によって養蚕が発達し、その豊かな経済的基盤に基づいて宮を置いた可能性が考えられ、また、息長山普賢教法寺に見られるように、息長氏との関係も視野に入れたとき、有力な候補地であることには変わりはありません。

筒城宮候補地③～三山木越前～



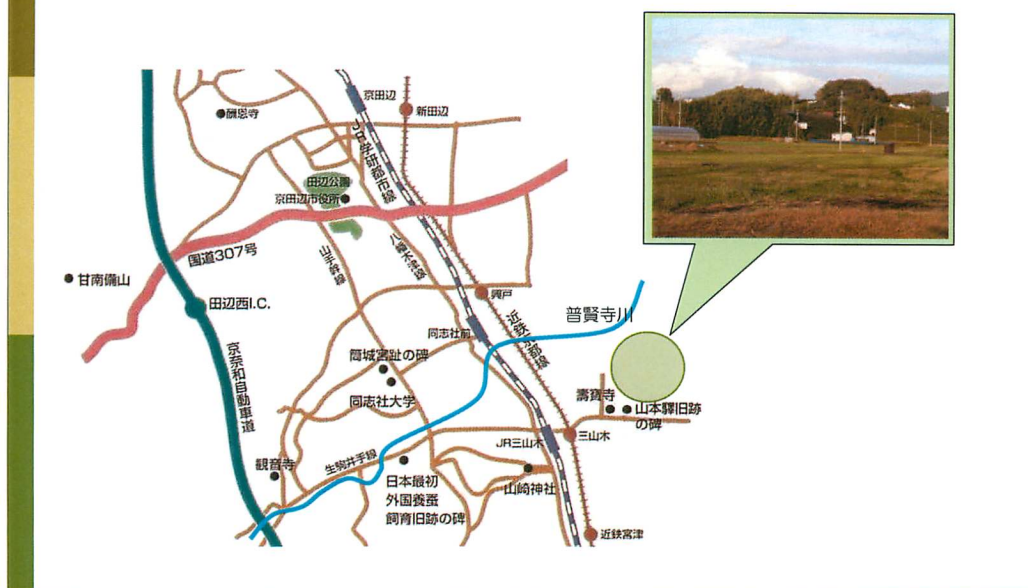
③三山木の越前(こしまえ)付近とする説

ここは普賢寺川の谷を挟んで都谷とは反対の丘陵地の斜面に位置します。この付近は越前という地名があります。

「越前」という地名は、継体の母 振媛の出身地「越前」(えちぜん)そのものであることが注目されます。

また、平成2年、宅地開発に伴い、越前付近にある南山城跡の発掘調査がされ、弥生時代(2000年前)の土器や杯が発見されています。

筒城宮候補地④～飯岡～



④飯岡周辺とする説

飯岡は標高70メートル足らずの小丘であります、木津川を隔てた右岸からもよく見え、木津川の水運を利用する船からは大切な目印であったと思われます。

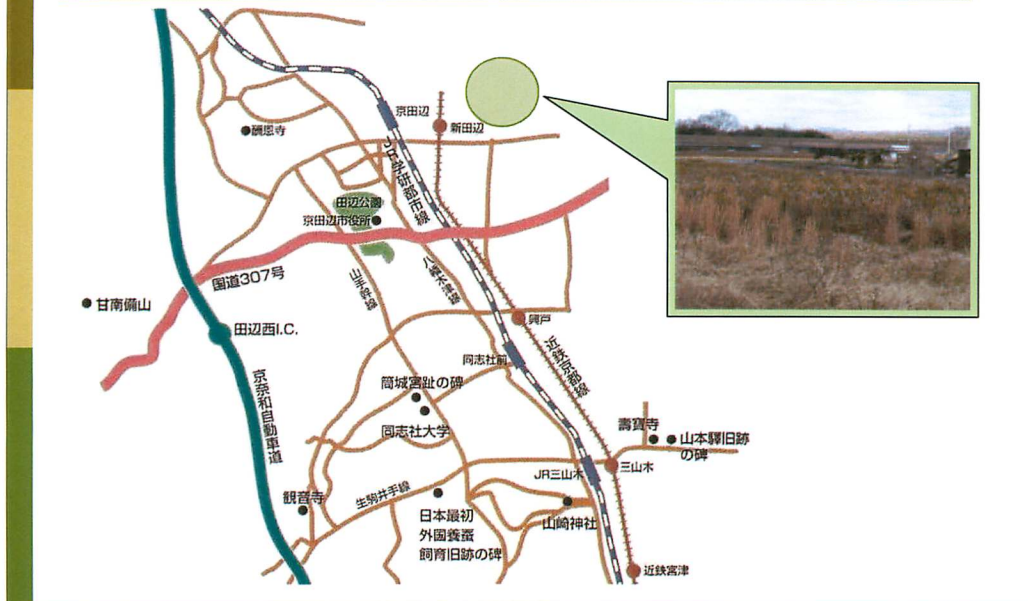
従って、丘の上から、木津川を見張るための絶好の場所であり、普賢寺川も飯岡の北西角をかすめるように流れており、水運を利用する上からも好位置にあります。

弥生時代の高地性集落の跡も発見されています。

また、伝承の域を出ないものの、継体天皇にかかわる皇子や孫に当たる人が比定されており、4世紀から6世紀の多くの古墳が存在することも、注目に値します。

これらのことから、飯岡の丘陵地は筒城宮跡の有力候補地であると言われてはいますが、確証となる遺跡は発見されていません。

筒城宮候補地⑤～田辺高校付近～

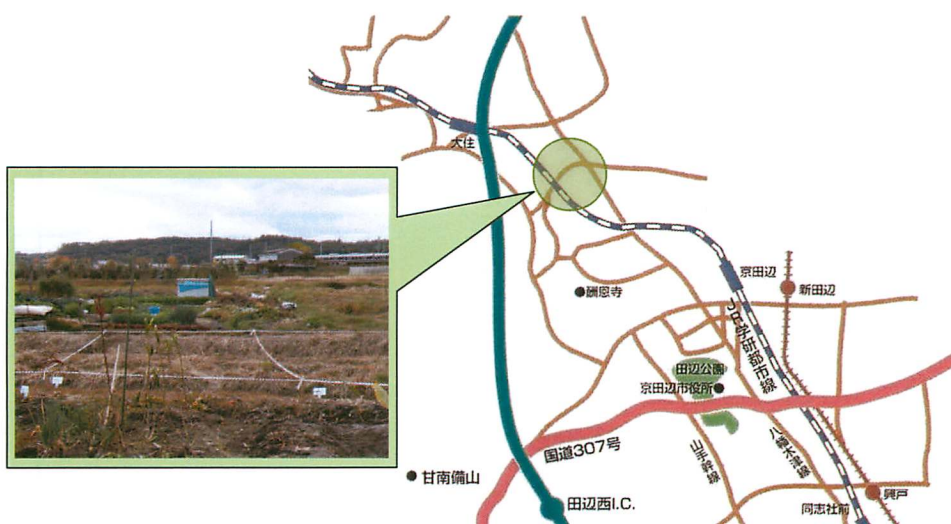


⑤田辺高校の北東一帯とする説

ここは木津川沿いに潟(江)があったことから、木津川の港のひとつと考えられ、ここから少し離れた場所(307号線南側)には、最近の天井川の工事で、地下から6世紀前半の多数の須恵器が出土しています。

水運を考えると好位置ではありますが、この地を直ちに宮跡と考えるよりも、筒城宮につながる船着場の役割を想定したほうがいいのではと思われます。

筒城宮候補地⑥～薪堂ノ後～



⑥薪の堂ノ後周辺とする説とする説があります。

最近注目されるのは、薪の堂ノ後周辺です。

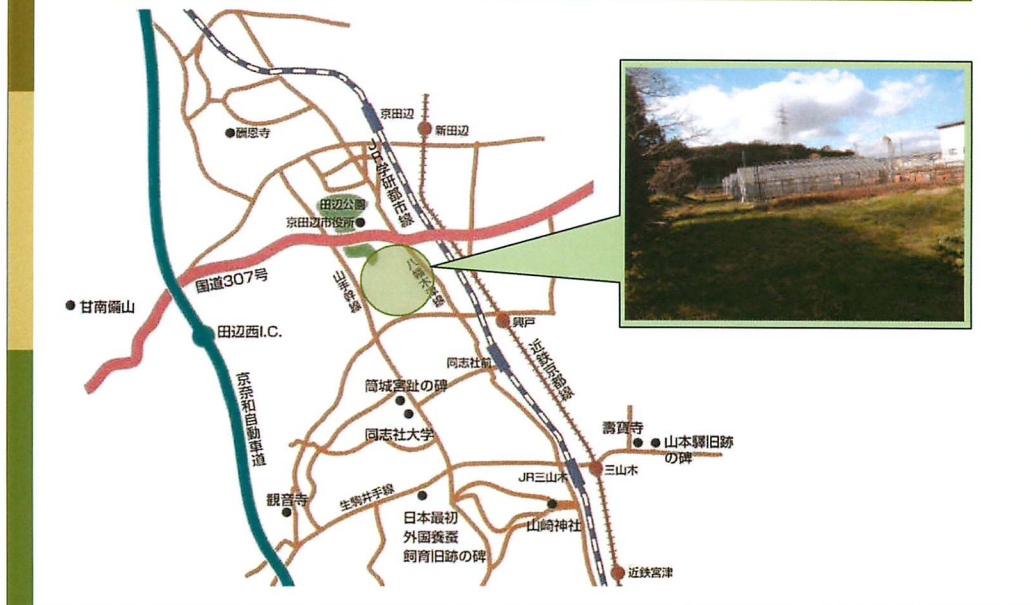
名前のごとく「堂の後」というのは、かつてこの付近に由緒ある何らかのお堂が存在していた事を表し、この「堂」こそ継体天皇の「宮」ではないかともいわれています。

地形的には、甘南備山と木津川とが一番接近した位置であり、この場所で6世紀初めの建物の柱跡が見つかる事を期待したいものです。

この付近の田んぼの中から、6世紀初頭の数個の須恵器が農作業中に発見されました。しかも、6世紀初めの土器は薪以外からは発掘されていないのが現状です。

さらに後に述べますが、この近くにある堀切7号古墳から出土した埴輪などの特徴から、有力な候補地の1つではないかと注目されています。

筒城宮候補地⑦～田辺警察署付近～



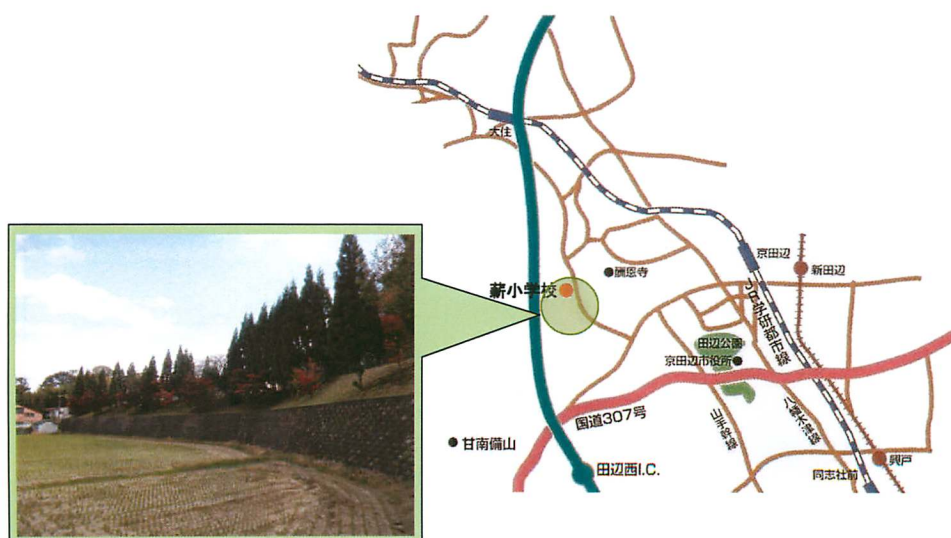
⑦京田辺警察署付近(興戸遺跡)とする説

この付近は、木津川を前にして180度見渡せる高台となっている。そして弥生から鎌倉、平安時代に至るまで多くの先人が生活した遺跡が残されています。

また、古代の山陽道を踏襲したであろう溝が発見され、これは府道八幡線と同じ方向を示しています。

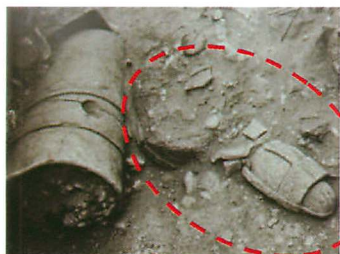
倉庫、建物跡も見つかり、遺物では二彩陶器が出土しています。これは通常都城や寺院、官衙で見つかるものであり、奈良時代の官衙を含んでいる可能性が高いといわれています。

堀切古墳群



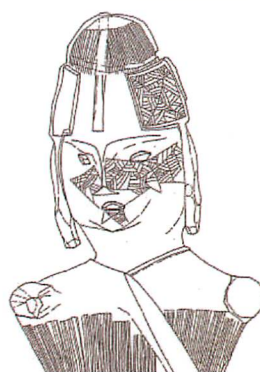
「堂の後」から 0.5Km 西方向の丘陵地にある堀切古墳は、京田辺市立薪小学校付近に存在し、1号～10号の古墳があります。時代は6世から7世紀初めの古墳とされています。京田辺市に存在する多くの古墳の中で、考古学的にみて、継体天皇とゆかりの深い古墳ではないかといわれています。特に堀切7号古墳から土出した埴輪は注目されています。

堀切7号古墳①



上：発掘の様子

右：出土した
人物埴輪



人物埴輪
(顔面直弧紋部分)



堀切7号古墳は6世紀前半ころの古墳といわれ、特にこの古墳からは、6世紀の武人の人物埴輪や尾張型円塔埴輪、尾張地方でしか見られない馬形埴輪などが出土しています。

しかも、この程度の小規模の古墳(15m円墳)に、埴輪があること自体も注目に値すると言われています。

(これらの発掘物は京田辺市歴史資料館で保管されています。)

かぶりものをつけた人物埴輪の顔には直弧紋の入れ墨模様が施されています。

堀切7号古墳②



出土した円筒埴輪

円塔埴輪の筒は「倒立技法」という方法で作成されている事が確認されています。倒立技法とは粘土紐を下から巻き上げ、円塔の半分ほどができた時点でひっくり返し、その上に円塔を続けて積み上げる方法です。出土した埴輪の断片を観察すると、上部と下部の境目がはっきりわかる作業跡が残っています。

堀切7号古墳③



出土した馬型埴輪



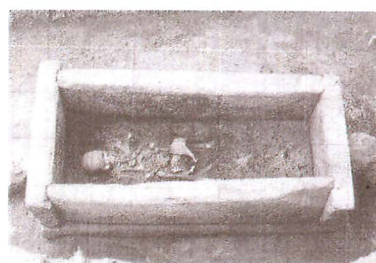
二つ目の特徴として、馬形埴輪の目の表現が垂れ目になっており、畿内の上がり目、水平の目と明らかに異なっております。これらの特徴は尾張埴輪特有の技法で、この事から堀切7号古墳から出土した埴輪は、尾張の連が派遣した工人によって作られた可能性が高いと言われています。

そして継体天皇妃の一人である目子媛は、この尾張の連の娘であることから、この古墳は考古学的に継体天皇との関連性が非常に高いといえる唯一の古墳と考えられます。

その他の堀切古墳



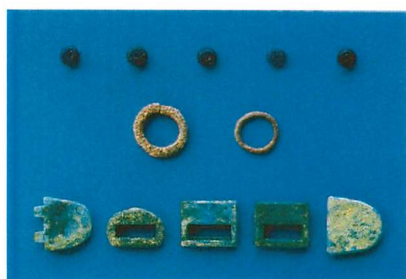
上左：堀切6号横穴墳 石棺



上右：堀切6号横穴墳 石棺内

下右：堀切9号墳出土
ガラス小玉・金環

堀切10号墳出土 帯金具



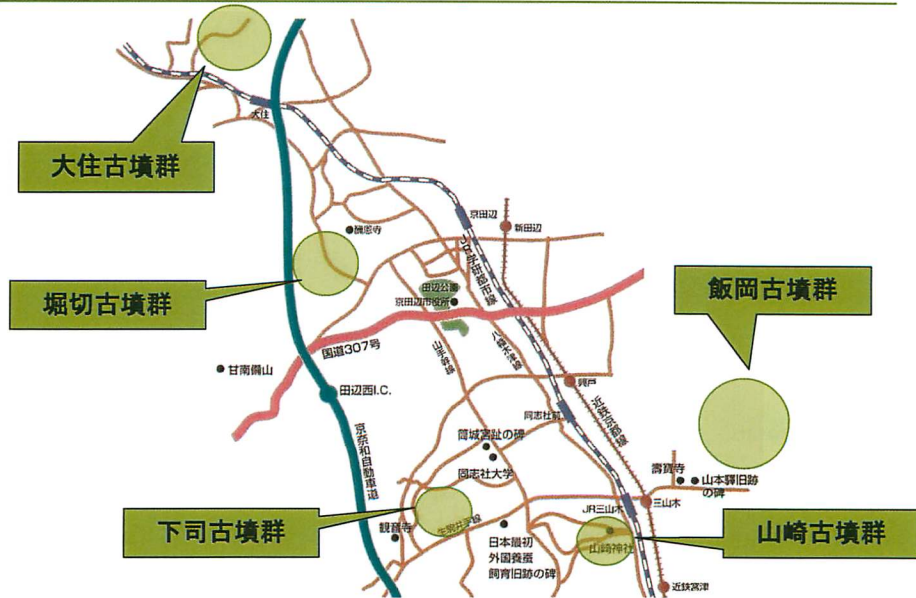
堀切7号古墳以外で、継体天皇とは直接関係がないと考えられている堀切古墳を説明します。

堀切6号横穴墳からは「組み合わせ式家形石棺が発掘され、棺の中から成年女子の骨一体分と耳輪、鉄製刀子が見つかります。周りには須恵器の壺や杯などあり、この石棺は古墳時代末期(7世紀前半)のころとみられています。

堀切9号墳からはガラス小玉、金環が見つかり、10号横穴墓から銅製の帯金具が出土しております。

以上の事から堀切古墳は、地位の高い豪族か、あるいは天皇に結びつく貴族などが葬られた墳墓ではないかと考えられます。

京田辺市の古墳・史蹟



第五章 京田辺市内の古墳や史跡、伝承話を紹介しましょう
 ここから説明する古墳は7号堀切古墳のように確たる証拠はありませんが、ボランティアガイドとして案内している古墳・史跡を紹介します。

普賢寺・天王地区～下司古墳～



下司古墳

この古墳群は7世紀前半のころ、普賢谷を望む丘陵の南斜面に築造されたもので、現在は同志社の学区内、体育館の西側斜面にあります。全部で8基からなる群集墳で、いずれも開口部が南を向いている横穴式石室です。埋葬施設として、背後に空掘をめぐらせて、多少の土砂を盛り上げて墳丘にしたものです。

中でも1号墳が一番大きく、南山城屈指の大形石室です。

普賢寺・天王地区～その他の史蹟～

朱智神社



地祇神社



この下司古墳が造られたころ、南西約500mの地点に筒城寺（673年創建の普賢寺ともいい、現在の観音寺です）が建立され、この普賢寺は、これらの古墳の造基集団に関わる氏寺と見なすことができ、既にお話したように息長氏が関係した古墳といわれております。

観音寺境内にある地祇神社は古くは御霊天皇と称して継体天皇を祀るとし、また山王権現と称して神功皇后を祀るともいわれています。

また、京田辺市天王にある朱智神社は、第9代天皇・開化天皇皇曾孫迦邇米雷王・神功皇后の祖父を主神とします。

飯岡地区



飯岡古墳群

玉水橋下流の木津川左岸に、南山城地方平野部としては珍しく、離れ島のように浮かんでいる飯岡丘陵があります。飯岡の地名は「昨岡」が詰まって飯岡になったとの説や、この地に清水が湧出するので「湯岡」が飯岡になったとの説もあります。

継体天皇の孫である桜井王が井戸を掘ったとの伝承もあるようです。昔から飲料水、消火水やその他の生活用水に使われてきました。

ここ飯岡地区は古墳が多く12塚と7井戸があったそうです。茶畑に囲まれた小高い所です。

また飯岡にある昨岡神社境内に万葉歌の石碑が建っています。

春草を 馬昨山ゆ 越え来なる
雁の使いは 宿り過ぐなり

飯岡地区～ゴロゴロ山古墳～



梛子王（継体天皇の皇子）の墓

ゴロゴロ山古墳

梛子王（継体帝の皇子）の墓との言い伝えがあります。古墳時代中期の古墳で、直径60m、高さ9m。よく整備され茶畑に囲まれています。ここからの同志社学校校舎と甘南備山の景観は素晴らしいものです。

飯岡地区～薬師山古墳～



桜井王（橿子王の皇子で
継体天皇の孫）の墓

薬師山古墳

桜井王（橿子王の皇子・継体天皇の孫）の墓との伝承があります。古墳時代中期の築造で、直径40m、高さ6m。墳頂には江戸時代の石仏を安置した薬師堂が立っています。この地は京都国体の時りの採火地となった所です。ここから東側に見る木津川の流れと東側の山地は一見の価値があります。

飯岡地区～阿弥陀山古墳～

朱大王（桜井王の皇子で継体天皇の曾孫）の墓



阿弥陀山古墳

別名石塚古墳。江戸時代寛永年間の石仏を安置。桜井王の皇子で継体天皇の曾孫である朱大王墳の碑があります。

古墳時代中期の築造で、直径25m、高さ4mの円墳です。

飯岡地区～飯岡車塚古墳～



【出土品】

石釧（いしくしろ）
車輪石（しゃりんいし）
鍬形石（くわがたいし）
勾玉（まがたま）
管玉（くだたま）



飯岡車塚古墳

築造は古墳時代前期末で、前方後円墳。長さ90m、後円部直径60m、前方部の幅45m、高さ4.5m。

明治35年の発掘で竪穴式石室から石釧、車輪石、鍬形石、勾玉、管玉など、多くの石製品が出土しましたが銅鏡は見つかりませんでした。それ以前に盗掘された物と思われます。

古墳の表面は葺き石で覆われ、周りは埴輪で囲まれています。埴輪の中には楕円筒埴輪があることが解っています。花咲乃墳とも言います。

飯岡地区～上殖葉王古墳～



上殖葉王（宣化天皇の皇子で継体天皇の孫）の墓

上殖葉王古墳

宣化天皇の子で継体天皇の孫である上殖葉王（恵波王ともいいます）の墓と言われています。

前方部は茶畑となり、後円部に「上殖葉王古墳」の碑があります。

現在、スライドのように竹笹が覆い、石碑に近寄ることができません。

飯岡地区～トツカ古墳①～



【出土品】
 神人車馬画像鏡
 神人歌舞画像鏡
 変形四獣鏡
 勾玉
 管玉
 小玉
 刀剣
 馬具



上：トツカ古墳より出土した
 神人車馬画像鏡

トツカ古墳

飯岡丘陵の東部、昨岡神社の東側の竹やぶの位置に竪穴式石室を持つ直径22m、高さ3.5mの円墳です。

頂上部には「神魂丘旧蹟」の石碑が立っています。

明治7年の発掘の際、銅鏡3面、道教の神仙、西王母と従者、四頭立て馬車と二頭立て馬車の出行や山岳が彫られている神人車馬画像鏡、神人歌舞画像鏡、変形四獣鏡や勾玉、管玉、小玉、刀剣、馬具がありました。現在京都国立博物館で保存されています。

飯岡地区～トツカ古墳②～



上：佐牙神社

下：昨岡神社



上：昨岡神社境内の
スタジイ

この古墳は古代において日本最初の醸造酒を伝えたという百済の渡来人を葬った古墳であったと言われています。

また、この北200m程のところには同じく渡来人の酒屋連墳があり、酒の神を祀る佐牙神社の所有地であったが、戦後の農地解放により佐牙神社の手を離れた後、取り壊され農地にされてしまいました。

またトツカ古墳の西側には29代欽明天皇の皇后・石姫の墓があったとの伝承もあります。

なお、隣接の飯岡昨岡神社(式内社)の境内の巨木・スタジイは京都の自然200選に選ばれています。

飯岡地区～飯岡東原古墳～

【飯岡東原古墳】

武埴安彦命（孝元天皇の皇子）の墓

【飯岡地区のその他の古墳】

神前古墳
池辺古墳
人足塚



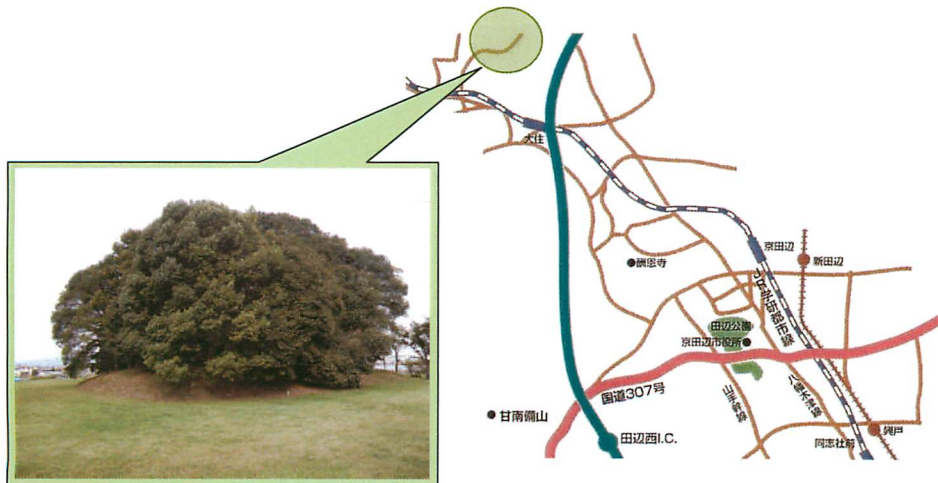
飯岡東原古墳

昨山古墳とも言い、六世紀前半の古墳で円墳だったと言われていますが破壊されていてその規模形態も不明です。

第8代孝元天皇皇子・武埴安彦命の墓とも言われています。発掘された遺物は同志社大学歴史資料館にあります。

この他、飯岡には神前王墳、池辺王墳、人足塚等があったようですが現在は消滅したようです。

大住地区～大住車塚古墳～

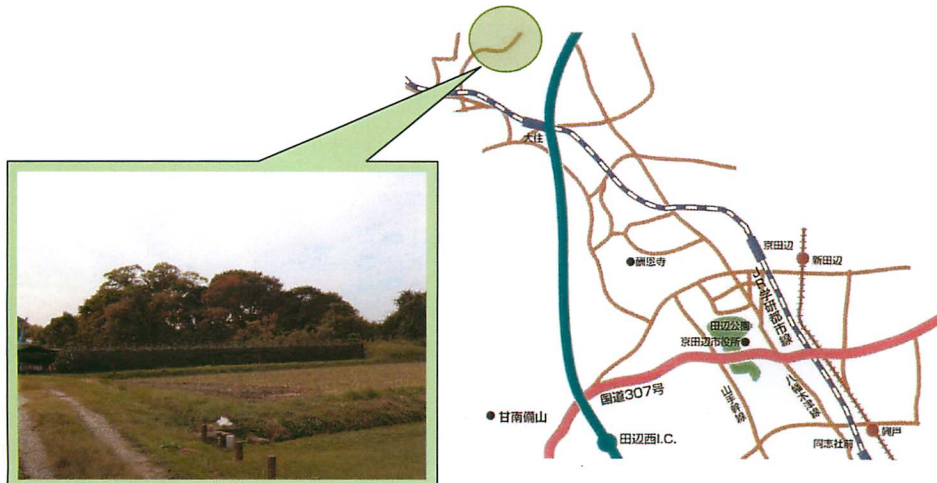


大住車塚古墳

別名智魂地山古墳と呼ばれています。全長66m、前方部は幅18m、高さ1.5m、後方部は幅36m、高さ4.5mであり、古墳の周囲には長方形の周濠の形跡が確認されており、内部は破壊された状態で、棺を納められていた主体部の構造は明確ではありませんが、竪穴式の石室か粘土を固めた槨であったと推測されます。

国の史跡に指定されています。築造年代は古墳時代中期であり、時代が合いませんが継体天皇第8皇子・兔皇子の墓と地元では言い伝えられています。

大住地区～大住南車塚古墳～

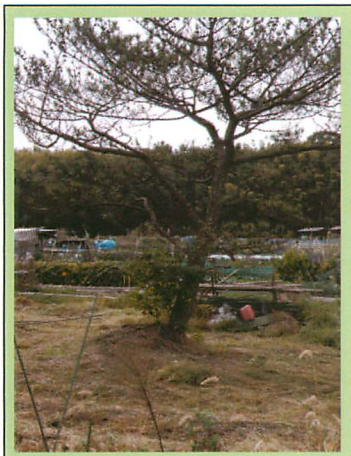


大住南山古墳

南西には大住南塚古墳があり、別名正辺池古墳と呼ばれています。こちらにも同規模の遺構と古墳の北面に池がありこれが周壕の一部であると確認されています。こちらにも5世紀初頭古墳時代中期の前半車塚古墳より少し早い築造で、こちらは第5皇子・耳皇子の墓と伝えられています。

両古墳とも平地に築かれ、外形、遺構ともよく残っています。このように周壕をもつ「前方後方墳」が二基も並んでこっていることは、全国的にも珍しい例であります。車塚の後方部に立つと以外に眺望が良く、古代には木津川からもこの威容が遠望できたのではないかと推測されます。現在は綺麗に整備されています。

大住地区～その他の古墳～



姫塚古墳



姫塚古墳

また、車塚古墳より南方向、50m程の水田の中に、松ノ木が1本生えた土盛が姫塚古墳で円墳です。

車塚、南塚いずれかの陪塚らしく、被葬者については、車塚古墳に葬られている人の姫だとする説もありますが確証はありません。

同じように車塚、南塚の北方100mほどにキンリン山(金輪山)古墳といわれる円墳がありましたが、現在は畑地となり、その位置、形態の確認は困難です。

その他の伝説



その他の伝承話

私達の京田辺市には継体天皇の伝承地の他に第14代・仲哀天皇の後であった神功皇后や第15代・応神天皇、そして第16代・仁徳天皇の後であった磐之媛にまつわる様々な伝説が残されています。

それらは日本で初めての酒造りや養蚕に由来するお話で、そのひとつひとつを紹介しましょう。

不違の池



不違の池



鉾立の杉

神功皇后ゆかりの伝承地として興戸を通る府道八幡・木津線沿いに「不違の池」と呼ばれる池があります。

半島出兵を行った際、神功皇后の一行が、旅の途中にこの地を訪れました。皇后はこの池の水で髪を洗い神託を受け、帰りにも立ち寄ることを約束されました。そして皇后が約束を破ることなく帰路の途中に立ち寄ったので、この池は「不違の池」と呼ばれるようになりました。

池の側には皇后が腰を掛けたとされる「御床の石」が今も残っていて、この石に座って遠征の酒盛りをした時の盃の跡が5～6個ほど残っています。現在この池は府道とビルに挟まれて見る影もありません。

不違の池から南に行くと大きな杉の木があり、池から北へ向かうと大きな松の木があります。杉と松の木は、約1キロメートル離れていますが、神功皇后が九州討伐した際、その行軍がこの松を通り過ぎ、南の杉に辿り着いた時、丁度鉾を持った列の先頭から最後までがぴったりと松と杉の間に並んだので、それぞれを「鉾立の杉」、「鉾立の松」と呼ぶようになったと伝えられています。不違の池は、この2本の松と杉のちょうど中間にあります。

酒屋神社



興戸には、古代より大陸から酒の醸造法を伝えた人々が住んでおり、近くには酒屋神社と呼ばれる神社があります。

この酒屋神社には仲哀天皇と神功皇后の皇子である応神天皇にまつわる話が残っています。

社伝によれば、神功皇后が半島出兵の際に3個の酒壺を神社の背後の山上に安置し、帰国後、その靈験に感謝して社殿を創立したとあります。

酒造りの発祥地？



佐牙神社



酒屋連友夏の塚のある所

またお酒に関する話として、古事記の応神天皇記に「渡来した酒造りの名人・須々許理が大陸の酒の技術を伝えた」とありますが、場所は定かではありません。

しかし宮津地区にある佐牙神社に伝わる「本源記」には「仁徳天皇の頃、大陸から酒造りに才のある曾々保理が山背で酒造りに励んだ」と記されています。須々許理の“許”と曾々保理の“保”は朝鮮語では同じ発音。天皇が一代違うが古事記の須々許理と佐牙神社の曾々保理は同一人物だと言われています。

須々許理が応神天皇に自ら造った酒を献上し、その酒をお飲みになった天皇が上機嫌になられたという故事も残っています。

余談になりますが、酒の読み方は、古代「さか」、「さが」であり、「さが」は朝鮮語で「発酵する」という意味を持っています。

その他にも河内国の酒造りを業とする「中臣酒屋連」の一族が興戸近辺に来住して酒造りを伝えたとも言われています。このような伝承を元に、京田辺市は日本での酒造りの発祥地ではないかと言われています。

奴理能美の養蚕①



最後に夫の度重なる浮気に腹を立てた妻のお話をいたしましょう。

「古事記」の仁徳天皇の条によると、昔々、多々羅の地には百済からの帰化人達が、豪族・奴理能美を中心に住んでおりました。ある時、仁徳天皇の皇后・磐之媛は天皇が八田媛を召した事に腹を立てて、難波の地より当地にこられたのが奴理能美の邸宅でした。磐之媛(当時の仁徳朝)と奴理能美との関係は定かではありませんが、奴理能美の権勢が磐之媛を擁護するほどの力があつたのでしょう。

奴理能美を中心とする一族達は、多々羅の地で養蚕をし、絹産業を営んでいました。

磐之媛は、ここを宮室として居住しました。天皇は何度も使者をつかわし、自らもこの宮室を訪ね和解を求められましたが、磐之媛は最後まで和解に応じる事も難波の都に帰る事もなく、当地で亡くなつたと「日本書紀」に書かれています。

奴理能美の養蚕②



奴理能美の元で過ごしているうちに磐之媛は、そこでいくつもの姿に変化する珍しい虫をご覧になり、“一度は這う虫になり、一度は殻になり、一度は飛ぶ鳥になって三色に変わる”と述べられました。磐之媛には、初めてみる蚕がとても不思議な生物に思えたのでしょう。

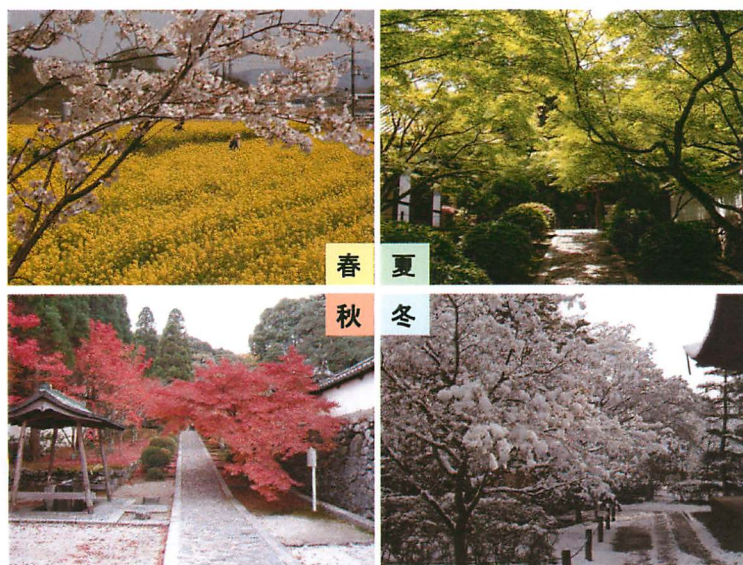
渡来人により我国に伝えられた養蚕業および絹の機織業。

多々羅集落の中程に「日本最初外国蚕飼育旧跡」という石碑が建っています。古代より、百済系渡来人奴理能美一族の養蚕機織りを中心とする経済的基盤は子孫に受け継がれ、古代の京田辺市は大変栄えていたと言われています。

それがのちに息長氏がこの地を根拠地とし、継体天皇が都を置いたという事に続くのです。

今も皇居内では天皇陛下が春に田植えをなされ、また皇后陛下も蚕を飼われ、育てられている伝統は、継体天皇の時代に詔を出されてそれを進めたと日本書紀に書かれています。

筒城の地 京田辺



継体天皇の誕生から幼・少・青年期、そしてついに政権の拠点である大和の磐余玉穗宮に入り、82歳で波乱万丈の生涯を閉じるまでの長い苦難の道程と継体天皇に関わる事柄を紹介しました。

私たちの住む京田辺市の地には継体天皇ゆかりの史蹟が数多く残されており、これらの話がたとえ伝承であったとしても、時空を越え1500年前のロマンあふれる古代へと、誘ってくれます。

おわりに



最後になりましたが、今回の 継体天皇の内容は、あくまで観光ボランティアの立場からお話をさせていただきましたので、「本当か」と疑うような話もあります。特に古墳などの埋葬者の名前や伝承話などは、江戸時代末に書かれた椿井文書によるところが多く、確たる証拠にかけております。これらを承知の上で話を進めてまいりました。

ただ伝承話や言い伝えなどは、どの地方でも、確たる証拠など無いのがほとんどです。しかしそこに住む人達にとっては、それらを伝えることにより、土地に誇りを持ち、心豊かになる事は確かです。

かの偉大なシュリーマンが、少年の頃読んだギリシア神話のなかの伝説都市トロイアを発掘したように、一見、荒唐無稽な伝承の中にも多くの真実が隠されているかもしれません。このような考えからお話しさせていただきましたことをご了解ください。

発行 京田辺観光協会

製作 京田辺市観光ボランティアガイド協会

継体天皇筒城宮遷都 1500 年記念事業

編集責任者 藤野隆司

発行日 平成 27 年 4 月 1 日 第一版